

情熱が開いた音楽の道

公立中学の音楽の先生から、国内の音大で最高峰といわれる東京芸大の指揮科の教授へ。そんな華麗な転身を遂げた人とは…。緊張しながら芸大に会いに行った酒井敦さん(63)は、満面の笑みを浮かべ、駄じやれを飛ばす愉快な男性だった。

取材時も「学生の合唱の練習を聴いていきませんか」とホールへと案内してくれる。本人は「一人の縁に恵まれてここまでやってこられた」と謙遜するが、そのサービスピッチに胸打たれ、周りの人が「酒井さんのためなら」と一肌脱ぎたくなるのかもしれない。

生まれも育ちも蕨市で、音楽に目覚めたのは3歳。「歌手の舟木一夫さんのドーナツ

蕨在住の指揮者・東京芸大教授

酒井 敦 さん

ひと物語



指揮は「コミュニケーション」という酒井敦さん＝いずれも川口市で

さかい・あつし 1961年、蕨市生まれ。同市在住。82年から8年間、川口市立中学校の教諭を務める。川口市内で音楽教室を主宰し、合唱や吹奏楽の指導を続けながら98年から東京芸術大の非常勤助手に。2007年に非常勤講師、15年助教、16年准教授、24年から教授(現職)。芸大フィルハーモニア管弦楽団事務局長。

「おまえが頑張っているのは分かるが、うちには金がない」音楽の専門学校で2年学んだ後、川口市内の公立中で音楽教員になり、吹奏楽部の指導に打ち込んだ。8年勤めたが、もう一度音楽を学びたいと父は苦渋の表情になった。



川口ぞうれっしゃ合唱団も指揮している

との思いが抑えられなくなり辞職。アルバイトで食いつなぎながら、JR西川口駅前で音楽教室を開いた。夢への道が開くきっかけは、教室を手伝う芸大生の紹介で指揮科の教授のレッスンに通い始めたこと。そこで教授から「助手にならないか」と声を掛けられた。音楽教室の傍ら、指揮を学び、芸大で働き続けた。初めてプロのオーケストラを指揮したときは、40代になっていた。

獅子奮迅の動きぶりで常勤に昇格したのは55歳。60を過ぎてから、昨春、教授になった。今は、今年6月に公演予定の「川口ぞうれっしゃ合唱団」の指揮者としても、参加する市民らの指導にいそしむ。「もっと口を開ける!」「そうです、表情を出して!」…。足を踏みならし、腕を大きく上げ、全身で伝える。練習後は汗びっしょりだ。指揮とは、「コミュニケーション」なのだという。演奏する人だけでなく、指揮棒を振りながら、背中で聴衆の空気を感じる。音楽が好き理由は、と聞くとしばらく考えて目を細めた。「結局、人が好きなんだと思います」

(出田阿生)